

『三玉挑事抄』注釈 春部（下）・夏部

岩 坪 健

本稿は『三玉挑事抄』春部（59～92番）と夏部（93～137番）を掲載する。担当者はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（ ）内には、担当者の氏名を示した。

森あかね・大八木宏枝・風岡むつみ・城阪早紀・植田彩郁・吉岡真由美・牛窓愛子・松井佑生

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

- 1 句読点を付け、会話文などは「」で括り、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。
- 2 誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。
- 3 和歌の上に、通し番号（59～137）を付けた。

一、「[出典]」の欄には、和歌と注釈本文の典拠を示す。和歌には『新編国歌大観』の歌番号（万葉集は旧番号のみ示

す)を記すが、無い場合は「該当歌なし」と表記し、『三玉和歌集類題』にあれば部立などを示す。注釈本文が『新編日本古典文学全集』(小学館。略称『新編全集』)、または『新釈漢文大系』(明治書院)に収められている場合は、そのページ数も記載する。ただし『新釈漢文大系』の白氏文集で未刊の巻は、続国訳漢文大成『白楽天全詩集』による。

一、「異同」の欄には、翻刻本文との異同を列挙する。ただし、濁点や送り仮名の有無、漢字と仮名の相違、仮名遣の相違は取りあげない。和歌の本文は『新編国歌大観』と、注釈本文は原則として版本と、それぞれ比較する。異同がない場合は「ナシ」と記し、ある場合は『三玉挑事抄』の本文―異文の順に列挙する。複数の作品すべてに異同がない場合は、書名をまとめて列挙して、末尾に「ナシ」と記す。

○源氏物語は、絵入り承応版本(略称『承応』。国文学研究資料館のホームページに公開)と、北村季吟『源氏物語湖月抄』(略称『湖月抄』。『北村季吟古註釈集成』新典社を使用)による。

○伊勢物語・大和物語・枕草子・古今集序・八代集・和漢朗詠集は、『北村季吟古註釈集成』(新典社)による。

○竹取物語は絵入り版本(無刊記版。同志社大学所蔵)による。

○うつほ物語は文化三年(一八〇六年)補刻本、狭衣物語は承応三年(一六五四年)版本により、いずれも三谷栄一『平安朝物語板本叢書』有精堂を使用する。

○漢籍も同志社大学に版本がある場合は、それを用いる。ない場合は『新釈漢文大系』などによる。

一、「訳」の欄には翻刻本文の現代語訳、「考察」の欄には和歌と典拠との関係など、「参考」の欄には参考資料などを記す。

一、歌題が同じである和歌が連続する場合、底本では二首めからの歌題は省略しているが、本稿では「訳」に限りすべての歌に題を示した。ただし補足した歌題には（ ）を付けて、底本にはないことを示す。

谷蕨

59 ひかりなき谷にはなへて草木にもわきて物うき初わらひかな

朗詠集。野相公。紫塵ウキ 蕨人レ拳手ヲ。

〔出典〕雪玉集、二七八番。和漢朗詠集、上、春、早春、一二番。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『和漢朗詠集』「拳―拳」。

〔訳〕 谷蕨

春の光が届かない谷では、おしなべて草木の中でも、とりわけもの憂げな初わらびであるなあ。

和漢朗詠集。小野篁。春になっていかにも物憂げに芽をもたげはじめた蕨は、その紫色の綿毛の穂が、あたたかも人が拳を握ったように見える。

〔考察〕漢詩の「蕨」を和歌に詠みこむ。蕨は早春、先端が拳状に巻いた新葉を出し、その様が頭を垂れているように見えるので「物うき」と表現された。

〔参考〕「光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし」（古今集、卷一八、雑下、九六七、清原深養父）

（大八木宏枝）

呼子鳥

『三玉挑事抄』注釈 春部（下）・夏部

60のとかなる春をしらせて万代の声をも山のよふこ鳥かな

漢書武帝紀曰、元封元年行幸緱氏_二詔_{シテ}曰、朕用事華山至于中嶽獲_三駮麋_二見_三夏后啓母石_一。翌日親登_三高高_二御史乘_一属在_三廟_一旁_一吏卒咸聞呼_三万歳_一者_三三云云_一。註。荀悦曰、万歳_ハ山神称_レ之_ヲ也。

〔出典〕雪玉集、五六〇番。『漢書』本紀卷六。〔異同〕『新編国歌大観』『和刻本正史 漢書(一)』ナシ。

〔訳〕 呼子鳥

のどかな春を知らせて、万代の声をも呼ぶという、山の呼子鳥であるなあ。

漢書武帝紀によると、元封元年、緱氏に行幸し詔を下して言った。朕は華山を祀り、ついで中嶽に来て駮麋を得、夏后啓の母石を見た。翌日、親ら嵩高山に登った。御史の乗曹二人が廟のかたわらにいて、吏卒たちは皆(山神が)万歳を三唱したのを聞いた云々。荀悦の注によると、万歳は山神がこれを称したものである。

〔考察〕武帝が嵩高山に登った時に、山神が万歳を三唱したことを踏まえて、当歌では万代の初めである春を知らせ、万代を三唱する声も呼ぶものとして、山の呼子鳥を持ち出す。

(大八木宏枝)

野雲雀

61なく雲雀猶床しめよ雲に入鳥を恨の春の末野に

朗詠集。花_ハ落_チ随_レ風_ニ鳥_ハ入_ル雲_ニ。

〔出典〕雪玉集、五五八番。和漢朗詠集、上、春、三月尽、五五番。〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 野の雲雀

鳴く雲雀よ、それでもやはり寢床を確保しておくれ。雲の彼方に姿を消してしまう鳥を恨む晩春の野の果てに。

和漢朗詠集。花は風のまにまに落ち尽くし、鳥は雲の彼方に姿を消して鳴き声も聞こえなくなる。

〔考察〕漢詩は、過ぎゆく春を引き留めるには関城の固めは役に立たず、花鳥は姿を消してしまうことを歌う（91番歌、参照）。当歌はそれを踏まえ、他の鳥は飛び立っても雲雀には行かないで欲しいという思いを詠む。「春の末野」に「春の末」（三月の末）と「末野」（野原の果て）を掛ける。

（大八木宏枝）

簾外燕

62 ^{柏玉}ふるす有とつはめや来つるかはほりのそれたにあらすこのまされに

大和物語云、む月十日の程なりけり。すのうちより、しとねさし出たり。ひきよせてゐる。すたれも、へりはかはほりにくはれて、所くなし。内のしつらひ見いるれば、むかしおほえて、ゑなとよかりけれど、くちおしくなりにけり。

〔出典〕三玉和歌集類題、春、簾外燕。大和物語、一七三段。

〔異同〕『三玉和歌集類題』ナシ。『大和物語』「ひきよせてゐる―ひきよせてゐぬ」「ゑなとよかりけれど―たたみなとよかりけれど」。

〔訳〕 簾外の燕

古巢があると勘違いして燕は来たのだろうか。蝙蝠の古巢すらないのに、蝙蝠に食われた簾を古巢と見間違えて。

大和物語によると、正月十日のころだった。御簾の中から敷物を差し出した。（男はそれを）引き寄せて座つ

ている。簾も縁へりは蝙蝠に食われて、ところどころない。家の中の調度や飾りつけをのぞいてみると、栄えた昔の様子が偲おもばれて、絵など立派だったことが分かるのだが、今はみすばらしくなってしまった。

〔考察〕『大和物語』一七三段は、五条あたりで雨に降られた良岑の宗貞の少将が、貧しい女の家で雨宿りをする場面。当歌は蝙蝠に食われた「小簾こす」（御簾の意）を、燕が古巢と勘違いして寄ってくる様を詠んだもの。

石清水臨時祭

（植田彩郁）

63 ちらしかし藤山吹も石清水けふのかさしは神のまに〜

花鳥余情曰、臨時祭、挿頭、使ハ藤、舞人ハ桜、陪従ハ山吹云云。

〔出典〕雪玉集、四二六一番。花鳥余情、第二〇、若菜下（源氏物語古註釈叢刊、二七二頁、武蔵野書院）。

〔異同〕『新編国歌大観』『花鳥余情』ナシ。

〔訳〕 石清水臨時祭

藤も山吹も石清水八幡の臨時の祭で散ることはないだろうよ。今日の挿頭は神の思し召しのままなのだから。

花鳥余情によると、臨時の祭で、挿頭として使者は藤、舞人は桜、陪従は山吹（をそれぞれ冠に飾る）云云。

〔考察〕石清水臨時祭は、石清水八幡宮で毎年旧三月の午の日に行う祭。『花鳥余情』の注釈は『源氏物語』若菜下の

巻（二七一頁）で、光源氏が紫の上や明石の女御たちを伴ない、住吉神社に盛大な願果たしの参詣をする場面において、「かざしの花の色〜は」という箇所につけられたもの。「挿頭かざし」は舞楽の人々が冠に飾る造花。

（植田彩郁）

桃花曝錦

64 柏玉 あひおもふにしきともみる色なれや物いはぬ桃の花のうへをも

朗詠集。公乗億。織レ錦ヲ機ノ中ニハ己ニ弁ヲ相思ノ之字ヲ。

漢書、李広伝賛。諺ニ曰、桃李不レ言、下自ヲ成ス蹊ヲ。

〔出典〕三玉和歌集類題、春、桃花曝錦。和漢朗詠集、上、秋、十五夜付月、二四一番。漢書（和刻本正史）、評林卷

五四、李広蘇建伝第二四。

〔異同〕『三玉和歌集類題』『漢書』ナシ。『和漢朗詠集』「己―己」。

〔訳〕 桃花、錦を曝す

互いに思い合う情を織り込んだ錦とも見える色であるなあ。ものを言わない桃花のあたりにまでも。

和漢朗詠集。公乗億。十五夜の月光があまりにも明るいので、妻が夫のため錦に織り込んだ相思の情をうたう文字も、機の中ではつきりと読み取れることだろう。

漢書、李広伝賛。諺によると、桃やすももの樹はものを言わないが、その木の下は自然と人に踏まれて小道ができる（ように、実践があれば名声もそれに伴うものだ）。

〔考察〕『和漢朗詠集』の漢詩は、東晋の竇滔の妻、蘇蕙が、流沙に左遷された夫のために錦に回文の詩を織り込んで贈った故事に基づき、遠別の夫を恋う妻の気持ちを描いたもの。「桃李不言、下自成蹊」は、『史記』一一（列伝）「李將軍列伝」第四九にも収録。当歌は、桃園の美しさを錦を広げたようだと例えて、ものを言わない桃花と、相思の情が織り込まれた錦を対比したもの。

（植田彩郁）

65 碧玉うすくこき三千世の花のからにしきさてかへらはやあかぬ木陰を

〔出典〕三玉和歌集類題、春、桃花曝錦。〔異同〕『三玉和歌集類題』「木陰を―木陰に」。

〔訳〕（桃花、錦を曝す）

濃淡のある美しい桃の花々は、三千年に一度だけ花を咲かせ、実を結ぶという西王母の桃の花のようだ。出世して、この花々のように美しい錦を着て帰りたいものだ。名残惜しい故郷へと。

〔考察〕「木陰」は華やかな都に対して、故郷を比喩的に表現したものだ。「錦を着て帰る」とは、立身出世をして故郷へ帰ること。出典は67番歌に同じ。

〔参考〕「立ちよらん木陰まれなる都にも清水しみづはありて汲むぞ涼しき」（草根集、二九五六）。

（吉岡真由美）

桃

66 同三千とせの花のうへにも咲てちるならひはかはる春やなからむ

〔出典〕三玉和歌集類題、春、桃。〔異同〕『三玉和歌集類題』ナシ。

〔訳〕 桃

三千年に一度しか咲かないという西王母の桃の花でさえも、花が咲けば散るという定めがなくなる春はないだろうなあ。

〔考察〕出典は67番歌に同じ。「三千とせの花」は、65番歌の「三千世の花」と同じ。当歌は、西王母の桃の花でさえ

散る運命にあるのだから、どの花も散ることを惜しむ情を詠む。

(吉岡真由美)

67句へなを花にさく名も百年の十つ、みつの春をかさねて

事文類聚曰、西王母以_二七月七日_一降_二帝宮_一、命_二侍女_一索_レ桃_ヲ。須臾_{ニシテ}至_ス。盤盛_ニ桃_七枝_ヲ、母自_ラ噉_レニ_一以_二

五枚_ヲ与_レ帝_ニ。々留_レ核_ヲ著_レ前_ニ。母_カ曰、「用此何為」。上_ノ曰、「欲_レ種_レト之_ヲ」。母笑_テ曰、「此桃_三千_一年_{ニシテ}而著_レ

子_ヲ。非_ニ下_一土_ノ所_レ植_ル」。

〔出典〕雪玉集、五五三番。古今事文類聚、後集、卷二五、桃実、方朔竊桃。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『和刻古今事文類聚 後集』「須臾至―須臾已至」「々留核―帝留枚」「三千年而著子―

三千年一著子」。

〔訳〕 (桃)

なおもこの芳香を漂わせてくれ。三千年の春を重ねて（一度だけ）花が咲く（という西王母の）評判のように。

事文類聚によると、西王母は七月七日に（崑崙山から）漢の武帝の住む宮殿へ降りてきて、侍女に命じて桃を探させた。侍女はあつという間に桃を探して戻ってきた。平たくまるい大皿に桃を七つ盛り、西王母みずからが二つを食べ、残りの五つを帝王に与えた。帝王は桃の種を残して自分の目の前に置いたままにしていた。それを見て西王母は、「それを用いて何をしようというのですか」と帝王に尋ねた。帝王は、「この桃の種を植えようと思うのです」と答えた。すると西王母は笑いながら、「この桃は実をつけるのに三千年の歳月を要します。人の住む世界に植えるものではありません」と言った。

〔考察〕西王母は西方の崑崙山に住む神女で、古くは半人半獣として描かれたが次第に美化され、漢代には女神として広く信仰された。当歌は西王母の桃の評判が長い歳月の間絶えなかつたように、今ここに漂う桃の花の芳香もずっとあり続けてほしいという願いを詠んだもの。

〔参考〕『和刻古今事文類聚』は、寛文六年(一六六六)刊行の訓点付き和刻本。構成は前集六〇巻、後集五〇巻、続集二八巻、別集三三巻(以上、宋の祝穆撰)、新集一五巻、外集一五巻(以上、元の富大用撰)、遺集一五巻(元の祝淵撰)より成る。

桃花

(吉岡真由美)

68をのつから道有けりな山賤のそのふも桃の花をしるへに

李広伝、見右。

文選註。濟曰、人皆好_二桃李_一之_レ邑_ヲ、遊_二其_一下_二故_レ成_レ蹊_ヲ。

〔出典〕雪玉集、四二六六番。文選、第三〇巻、雜詩下、謝玄暉、和_二徐都曹_一。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『和刻本文選』「桃李之邑―桃李之色」。

〔訳〕 桃の花

自然と道があるのだなあ。身分の低い者の家の庭にも桃の花をしるべにして。

李広伝は右の通りである。(64番歌、参照)

文選註。呂延済によると、人々は皆、桃李の園を好むので、その木の下で遊び、そのために小道ができる。

〔考察〕「文選註」は、謝玄暉の漢詩「和徐都曹」の一節「桃李成蹊逕」に、呂延濟が注を付けたもの。当歌は、徳の高い人には自然に人が集まるといふ諺に対して、身分の低い者でも桃の花があれば、自然に人が集まると詠む。

(風岡むつみ)

三月三日

69空かけて色も匂ひも三千とせに咲てふ桃の花かつらせり

万葉集、十九。三月三日宴歌、大伴家持。

新古今入
から人も船をうかへてあそふてふ今日そわかせこ花かつらせる

〔出典〕雪玉集、五五一番。万葉集、卷一九、四一五三番。新古今和歌集、卷二、春下、一五一一番。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『万葉集』「花かつらせる―花かつらせよ」。『新古今集』「から人も―から人の」「花かつらせる―花かつらせよ」。

〔訳〕 三月三日

空一面に花の色も香りも満ちあふれ、三千年に一度咲くというあの桃の花で、花かずらを飾って遊んだことよ。

万葉集、卷第十九。三月三日宴の歌、大伴家持。

唐土の人も船を浮かべて遊ぶという今日、わが友は皆、花かずらを飾って遊んでいるよ。

〔考察〕『万葉集』は大伴家持が三月三日に自邸で行った、曲水の宴の際に詠んだ歌。三千年に一度咲く桃花については、65〜67番歌参照。「三千とせ」の「みち」に「満ち」を掛ける。

70あひにあひて空も花にや酔のうちの光さしそふ春のさかつき

(風岡むつみ)

本朝文粹。三月三日詩序。菅贈大相国。春ノ暮月、月ノ三朝、天酔_リ于花_ニ。桃李ノ盛_{ナル也}也云云。

〔出典〕雪玉集、七四七八番。本朝文粹、卷第一〇、二九五番。

〔異同〕『新編国歌大観』「空も花にや―空の花にや」^本。『本朝文粹』ナシ。

〔訳〕(三月三日)

(三月三日という) 折に合って、空も桃李の花に酔っているのだろうか。夕暮の月の光が射し加わる春の盃であるよ。

本朝文粹。三月三日詩序。菅原道真。春の終りの三月、それも三日という日、天が一面に花に酔ったように紅に染まる。それは桃李が満開であるからだ。

〔考察〕出典は宇多天皇が催した三月三日の曲水の宴で、菅原道真が詠んだ詩「花時天似酔」の序。当歌は「酔のうち」に「宵のうち」、「さかつき」(盃)に「月」を掛ける。

〔参考〕菅原道真の詩は『菅家文章』巻五や『和漢朗詠集』(上、春、三月三日付桃、三九番)にも収められ、本文異同は見られない。

(風岡むつみ)

71色も香もあかぬ春かな鳥の跡をうつすなかれの花のさかつき

淮南子曰、昔_シ蒼頡_ハ頡_レ頡_レ作_レ書_ヲ而天雨_レ粟_ヲ鬼夜_レ哭_ス。許慎_カ曰、蒼頡始_テ視_ニ鳥跡_ノ之文_ヲ造_ニ書契_ヲ。則詐_レ偽萌生_ス云

云。

〔出典〕雪玉集、五五二番。淮南子、卷八、本経訓、三六九頁。淮南鴻烈解、卷八、本経訓、五丁裏。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『淮南子』「昔蒼頡―昔者蒼頡」〔許慎曰蒼頡始視鳥跡之文造書契則許偽萌生云云―ナシ〕。『淮南鴻烈解』「昔蒼頡―昔者蒼頡」〔許慎曰―ナシ〕。

〔訳〕（三月三日）

色も香も飽きることのない春であることよ。鳥の跡を写して漢字が作られたが、その漢字を写して漢詩を詠む曲水の流れに、花の宴の美しい杯が流れてくるよ。

淮南子によると、昔、蒼頡が始めて文字を作ると、天は粟の雨を降らせ、鬼は夜泣きした。許慎によると、蒼頡が初めて鳥の足跡の文様を見て文字を作った。それにより、人々に偽りの心が起こりはじまった云々。

〔考察〕当歌は、三月三日に行なわれた曲水の宴の様子を詠んだもの。参会者は庭園の曲水の流れに沿って所々に座り、上流から流される杯が自分の前を通り過ぎないうちに詩歌を詠じて杯を取り上げ酒を飲む。

〔参考〕許慎は後漢の人。彼の著書で中国最古の文字学書『説文解字』の序にも、黄帝の臣であった蒼頡が鳥跡を見て文字を創作したことは書かれているが、「許慎曰」以下の本文は見当たらない。その本文は高誘注の『淮南鴻烈解』に見られ、寛文四年（一六六四）年版の高誘注茅坤批評『淮南鴻烈解』による。「鳥の跡をうつす」に、鳥の跡を写して漢字が出来たことと、曲水の宴で漢字を紙に写すことを掛ける。

（城阪早紀）

春神祇

『三玉挑事抄』注釈 春部（下）・夏部

72 石清水柏玉その神わざのそのかみに今たにかへす袖の春風

公事根源云、石清水臨時祭、まつ二月の頃より、奉行の蔵人、使、舞人を申さたむ。中の辰の日、試樂の事有云々。中略。竹台の下にて、竹の枝を折てかさしにさす。仁寿殿の廊の下よりす、みて、御前につらなりたつ。陪従、近衛の召人、求子うたひ、笛、箏の音をあはす。舞人まひおはりて、大比礼かへしうたひて、舞たえすしてまかりいつ云々。

〔出典〕 柏玉集、一八七七番。公事根源、五五、石清水臨時祭。

〔異同〕 『新編国歌大観』「かへす―かへせ」「春風―はつかぜ」。『公事根源』「求子うたひ、笛―求子うたひ、こと、笛」。

〔訳〕 春の神祇

石清水八幡宮はその昔、あの神業を成し遂げた神に、今でもなお舞人が袖をひるがえして舞い、その袖が春風にひるがえっているなあ。

公事根源によると、石清水臨時祭は、まず二月の頃より奉行の蔵人・祭使・舞人を定める。中の辰の日に、祭当日に社頭にて行う舞樂を、主上の御前で試みる云々。中略。清涼殿の東庭にある竹を植えた台うぐいすの下で、竹の枝を折り舞人の冠に刺す。仁寿殿の廊のもとより進み、御前に列となり立つ。（舞人に従い歌を歌ったり笛を吹いたり琴を弾く）陪従や、近衛司の将曹府生で音楽に堪能な者たちが、東遊の「求子」を歌い、笛・箏の音を合わせて奏でる。舞人が舞い終わると、東遊の終わりに歌う「大比礼かへし」を歌って舞いながら退出する云々。

〔考察〕石清水臨時祭は、朱雀天皇の天慶五年（九四二）、承平・天慶の乱平定の報賽のために臨時に行われたのが始まりで、のち恒例となる。東遊は、東国の風俗歌に合わせて舞うものであったが、平安時代には宮廷に取り入れられ貴族や神社の間でも行われるようになった。

〔参考〕『公事根源』の本文は、関根正直『修正公事根源新釈』（六合館、一九二五年）による。

春居処

（城阪早紀）

73花あれはよるも入来てとさしせぬ世を光なる春の家く

白氏詩。遥^ニ見^テ人家^ヲ花^{アレハ}便^チ入^ル。

〔出典〕雪玉集、六三二番。白氏文集（白樂天全詩集4）、卷一四、又題一絶。

〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕春の居るところ

花が咲いていれば、夜でも入って来られるように戸を閉ざすこともしない、平和な世であるので、春の夜が更けても、どの家にも明かりが灯っているよ。

白氏文集。遙かに人の家を見て花が咲いていれば、すぐに入る。

〔考察〕漢詩の全文は、「貌随年老欲如何、興遇春牽尚有余、遙見人家花便入、不論貴賤与親疎」（容貌は一年増しに老衰してどうにもし難いが、春になると余りあるほどの感興に引かれる。遙かに人の家を見て花が咲いていれば、貴賤親疎に関わらず入りこんで見る）である。第三・四句は、『和漢朗詠集』（上、春、花付落花、一一五番）にも

採録。

(城阪早紀)

春海

74とこよにもゆかはやゆかん水の江のうらゝなる日のあまの釣舟

日本紀。大泊瀬幼武ノ天皇二十二年、秋七月、丹後ノ国余社ノ郡管川ノ人、水江ノ浦嶋子、乗レ舟而釣、遂得ニ大亀^一。便^レ化^{シテ}為^レリ女^ト。於^レ是浦嶋子、感^{シテ}以^レ為^レ婦、相逐^テ入^レ海ニ到^ニ蓬萊山ニ歴^ニ觀仙衆^一。語^ハ在^ニ別卷^ニ云云。

〔出典〕雪玉集、四一九四番。日本書紀、卷第一四、雄略天皇、二〇六頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『日本書紀』「丹後国―丹波国」。

〔訳〕 春の海

(海の向こうにあるという) 常世の国にも行けるならば行こう。水の江の入江がのどかな春の日に、漁師の小さな釣り舟で。

日本書紀。大泊瀬幼武天皇の二十二年、秋の七月に、丹後国余社郡管川の人、水江浦嶋子は、舟に乗って釣りをしている大亀を得た。大亀はたちまち女になった。浦嶋子は心ひかれて妻にし、あとを追って海に入り、蓬萊山に着いて、仙衆を見て廻った。この話は別巻にある云云。

〔考察〕「余社」は「与謝」に同じ。もと丹波国の管下にあったが、和銅六年四月に与謝郡を含む五郡とともに分かれて丹後国となる。

〔参考〕神仙郷に渡ったという浦嶋子伝説は、『万葉集』卷九(詠水江浦嶋子二首并短歌)一七四〇番)と、『丹後

『国風土記』に見られる。

(松井佑生)

春声

75 花に^{拍玉}鳴初うくひすの声はかり我うち出ん言のはそなき

古今序。やまと歌は人の心をたねとして、よろつの言のはとそなれりける。世の中に有人、ことわざしけき物なれば、心に思ふことを、みる物、きくものにつけて、いひ出せるなり。花になくうくひす、水に住蛙の声をきけは、いきとしいける物、いつれか歌をよまさりける。

〔出典〕三玉和歌集類題、雑、春声。古今集、仮名序、一七頁。

〔異同〕『三玉和歌集類題』「声―色」。『古今集』ナシ。

〔訳〕 春の声

花間にさえずり春を告げるうぐいすの初声に劣らず、私の口から出るような言葉はないなあ。

古今集の仮名序。やまと歌とは、人の心を種にたとえると、それから生じて口に出て無数の葉となったものである。この世に暮らしている人々は、さまざまの事にたえず応接しているので、心に思うことを見たこと聞いたことに託して言い表したものが歌である。花間にさえずる鶯、清流にすむ河鹿の声を聞けば、自然の間に生を営むものにして、どれが歌を詠まないと見えようか。

〔考察〕『古今集』仮名序は、和歌とは何かについて述べた箇所であり、鶯や河鹿など生きているもので歌を詠まないものはないと説く。当歌は、鶯の初声ほど優れた歌を作れない、と詠んだもの。『古今和歌集序聞書三流抄』など

中世に成立した『古今集』の注釈書には、鶯も和歌を詠む例として、鳴き声を漢字で写すと漢詩になり、それを翻訳すると和歌になった、とある。

（松井佑生）

春祝

76 春の水春の風もおさまれる世の声そへてのとか成らん

白氏文集。春風春水一時ニ来。

〔出典〕雪玉集、四二三〇番。白氏文集（白樂天全詩集4）、卷一〇、府西池。

〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕 春の祝

春の雪解けの水も春風も治まったのだろうか。（春の訪れを喜ぶ）世間の声も加わり穏やかになったのだろう。

白氏文集。春の風と春の雪解けの水は同時に来る。

〔参考〕「をさまれる世の声」で始まる和歌が、『柏玉集』に二首ある（二七・一九〇四番）。

（牛窓愛子）

春野

77 名のみしてとふ火も見えず春日野や風しつか成御代の春哉

続日本紀曰、元明天皇、和銅五年正月、廢ニシテ河内国高安ノ烽ヲ始テ置ニ高見烽及大和国春日ノ烽ヲ以テ通ニ平城ノ也。

史記、周本紀曰、幽王為ニ燧燧太鼓ヲ有ニ寇至ル則拳ニ烽火ヲ。諸侯悉ク至ル云云。正義曰、昼日ニハ燃レ烽以望ニ火煙ヲ

夜^ハ拳^{レテ}燧^ヲ以望^ム火光^一也。

〔出典〕雪玉集、六〇〇五番。続日本紀（新訂増補国史大系）、元明天皇、和銅五年正月。史記、周本紀、一九九頁。
史記正義（四庫全書）、周本紀。

〔異同〕『新編国歌大観』『史記正義』ナシ。『続日本紀』『大和国―大倭国』。『史記』『燧燧―燧烽』。

〔訳〕 春の野

名前だけで狼煙も見えない春日野であるなあ。風も静かな天皇の治世の春であることよ。

続日本紀によると、元明天皇の和銅五年（七二二）正月、河内国高安の烽を廢止して、初めて高見の烽と大和国春日野の烽を置くことで、平城京に連絡を通じさせた。

史記、周本紀によると、幽王は烽火と太鼓を造らせて、寇の侵入があると烽火を挙げ、諸侯に連絡するようにしておいた。正義によると、昼間は烽を燃やすことで煙を望見し、夜間は燧を挙げて火の光を望見する。

〔考察〕春日野（奈良市春日山の裾野）には「烽」が置かれているが、それが機能することもない平和な時代を詠んだもの。

（牛窓愛子）

春猷

78鹿をさして馬ともけにそ夕霞三笠の野への遠きよそめは

史記曰、趙高欲^レ為^レ亂^ヲ。恐^ニ群臣不^レ聽、乃先^ツ設^レ驗^ヲ持^レ鹿^ヲ獻^ニ於^二二世^ニ曰、「馬也」。二世笑^テ曰、「丞相誤^カ邪、謂^レ鹿^ヲ為^レ馬」。問^ニ左右^ニ、左右或默^シ、或言^テ馬^ト、以^テ阿順^ヲ趙高^ニ云云。

『三玉挑事抄』注釈 春部（下）・夏部

〔出典〕雪玉集、六〇〇九番。史記(本紀 上)一、秦始皇本紀第六、三八一頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『史記』「於二世于二世」。

〔訳〕 春の獣

鹿を指して馬と言ったのも、なるほどだなあ。夕方、霞に覆われた三笠の野を遠いところから見ると(鹿が馬に見えるなあ)。

史記によると、趙高は反乱を起こそうと思った。群臣が自分の意見を聴き入れないのでないかと心配し、まず試してみようとして、鹿を二世に献じて、「これは馬です。」と言った。二世は笑って、「丞相は間違ったのではないか。鹿を馬だといって」と言った。左右の臣下たちに問うと、左右の臣下たちの或るものは沈黙したままであり、或るものは馬だといって趙高にへつらい従った云々。

〔考察〕趙高は秦の宦官で、始皇帝の死後、丞相の李斯と共に始皇帝の長子扶蘇を殺し、次子の胡亥を二世皇帝とした。当歌は、趙高が馬を鹿だと無理に言って、その反応から敵味方を判別しようとした『史記』の一節を踏まえ、遠目で見ると三笠の野(春日山の西峰である三笠山の裾野)にいる鹿も馬に見えることを詠む。「げにぞ夕」の「夕」に「ゆふ」(言ふ)を掛ける。

(植田彩郁)

春歌中 住吉法楽云々

79百千とりさこそはあまのさへつりも春のうみへのうらゝなる空の

すまの巻。あまともあさりして、かいつ物もてまゐれるを、めし出て御らんす。浦にとしふるさまなど、とは

せたまふに、さま／＼やすけなき身のうれへを申す。そこはかとなくさへつるも云々。

〔出典〕雪玉集、七一七五番。源氏物語、須磨卷、二二四頁。〔異同〕『新編国歌大観』『湖月抄』『承応』ナシ。

〔訳〕 春歌の中 住吉法楽云々うんぬ

百千鳥が天でさえずる声は、さぞかし海人が何やら分からぬことを喋っているようだ。春の海辺ののどかな空のも
とど。

須磨の巻。海人たちが漁をして、貝の類を持参するのを、(源氏の)御前にお呼び出しになってごらんになる。
海辺で長い年月暮らしている様子などを(源氏が)尋ねさせなると、いろいろと苦勞の多い身の上のつらさ
を申しあげる。何やら分からぬことをとりとめもなく喋っている云々。

〔考察〕『源氏物語』は、須磨にいる光源氏を頭中将が訪問し、光源氏が料理に使う貝の類を持参した海人たちに暮ら
しの様子を尋ねる場面。「あま」は「天」と「海人」の掛詞。「百千鳥」は古今伝授の中の三鳥の一つで、和歌の神
を祭った住吉大社にふさわしい。

(植田彩郁)

春
宇津山

80 あふ人も夢路はかりのうつの山わか入みちはくらき霞に

いせ物語云、行く／＼て、するかの国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わかいらんとする道は、いとくらふ細
きに、蔦楓は茂り、物こゝろほそく云々。

〔出典〕雪玉集、五〇七五番。伊勢物語、九段。〔異同〕『新編国歌大観』『くらきーくらき』ふか。『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 春の宇津の山

あの人に会えるのも夢の中だけで、これから自分が入ろうとする宇津の山辺の道は暗い霞に覆われていて。

伊勢物語によると、一行は旅をつづけて駿河の国に着いた。宇津の山に来てみると、これから自分が入ろうとする道はひどく暗く心細いうえに、蔦や楓は茂り、なんとなく心細く云々。

〔考察〕『伊勢物語』は、我が身を無用のものと思いきみ東国へ旅に出た男が、駿河の国に着き宇津の山を越えようとする場面。そのとき男が詠んだ和歌「駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人に会はぬなりけり」も、当歌は踏まえている。

（植田彩郁）

款冬

81花の中にひとへに菊のたくひとや咲く山吹に春もくれけり

元種詩。不_レ是_レ花_ノ中_ニ偏_ニ愛_{スル}ニ菊_ヲ、此_ニ花_開テ後_更ニ無_シケレハ也_ハ花。

〔出典〕雪玉集、四八八八番。和漢朗詠集、上、秋、菊、二六七番。〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 款冬

（山吹は）花の中ではまったく菊と同類であろうか。（菊が散ると秋が暮れるように）山吹が咲いて春も暮れたなあ。

元種の詩。私は多くの花の中でも、菊だけを愛するわけではない。でもやはり菊に特別の思いを寄せるのは、この花の咲いた後に、来年の春までほかには花らしい花がないからだ。

〔考察〕「花開後」の箇所、『元氏長慶集』には「花開尽」とある。この異同に関して北村季吟『和漢朗詠集註』には、「或記云嵯峨隱君子ノ琴ヲヒキケルニ元慎ガ靈ノアラハレテ云ケルハ後ノ字ハアママリナリ此花開尽トアルベキナリト云シ云云」と引用している。

折款冬

(大八木宏枝)

82 雨にきるみのなしとてや山吹の露にぬる、は心つかからを

後拾遺和歌集云、小倉の家に住侍る頃、雨のふり侍りける日、みのかる人の侍りければ、山吹の枝を折て、とらせて侍りけり。心もえてまかり過て、またの日、山吹心えさるよし、いひおこせて侍りけるかへしに、いひつかはしける。兼明親王。

七重八重はなはさけとも山吹のみのひとつたになきそあやしき

〔出典〕雪玉集、二二六六番。後拾遺集、卷一九、雑五、一一五四番。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『後拾遺集』「住侍る頃―すみ侍ける比」「ふり侍ける日―降ける日」「山吹心えさるよし―やま吹の心もえさりしよし」「兼明親王―中務卿兼明親王」。

〔訳〕 款冬を折る

雨の時に着る蓑みがないからだろうか。(実のない) 山吹が露に濡れているのは自分のせいであるよ。

後拾遺和歌集によると、小倉の家に住んでいました頃、雨が降ってしまいました日に、蓑を借りる人がいましたので、山吹の枝を折って持たせました。山吹の枝を与えた意味が理解できないまま去りまして、またの日に、山

吹の枝の意味が理解できない旨を言い寄越して来ました返しに詠み送った。兼明親王。

山吹の花は七重にも八重にも咲くけれども、実の一つすら付かないのは奇妙なことだ。貸せる蓑が一つもないのはおかしいことだ。

〔考察〕『後拾遺集』の和歌は「みの」に山吹の「実の」と「蓑」を掛け、山吹の枝を渡したのは蓑がないからだと打ち明けたもの。当歌はそれを踏まえ、山吹が露に濡れるのは実のない花、すなわち蓑がない花だからだと詠む。

(大八木宏枝)

春歌中

83 おろかなる心の水のかはつまで言葉の花はしるかこそ聞

古今序。まへにしるし侍り。

〔出典〕雪玉集、四三六九番。古今集、仮名序、一七頁。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 春の歌の中

愚かな心の持ち主である水に住む蛙の声までもが、ことばの花である和歌を知っているかのように聞こえる。

古今集仮名序。前に記しております。(75番歌、参照)

〔考察〕「言葉の花」には、修辞を凝らした華やかな言葉という意味もあるが、ここでは和歌を指す。

(吉岡真由美)

松藤

84 雲をしのく松のうへなる藤の花水なき空の波かあらぬか

李白。南軒有_二孤松_一、柯葉自綿_ス。何当凌雲霄、直上数千尺。

〔出典〕雪玉集、五八四番。李太白詩（和刻本漢詩集成2）、卷二四、南軒松。

〔異同〕『新編国歌大観』『李太白詩』ナシ。

〔訳〕 松と藤

雲を押しのけるような立派な松の上に藤の花が咲いている。その藤波は水がない空に波があるのか、と見間違えるほどだ。

李白。家の南軒の近くに一本の松があり、その枝葉は稠密にして重なり合うくらいである。いよいよ成長して直立数千尺に及べば、きつと大空をしのぐほどになるだろう。

〔考察〕「南軒松」は李白が孤松を賞賛して、その長寿を祝した詩。当歌の第四句「水なき空」の典拠は、「さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空に波ぞ立ちける」（古今集、二、春下、八九、紀貫之）。

〔参考〕『和刻本漢詩集成』所収本は、延宝七年（一六七九）覆明刊本。

（吉岡真由美）

惜春不駐

85 しはしとて入日をまねく玉ほこの道たにもなくくる、春かな

淮南子曰、魯陽公与_レ韓搆_レ難_ヲ、戰酣_{ニシテ}日暮。援_テ戈_ヲ而揮_レ之_ヲ、日反_{ルト}三_ノ舍。

〔出典〕雪玉集、五九五番。淮南子、卷六、覽冥訓、二九二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『淮南子』「援戈而揮之―援戈而擣之」「日反三舍―日為反三舍」。

〔訳〕 春を惜しむに留まらず

もう少しだけと思つて、暮れていく日を招きよせる戈という手立てすらなく、暮れてゆく春であるなあ。

淮南子によると、楚の魯陽公が韓と戦っていたとき、まだ戦の最中だというのに日が暮れようとした。そこで戈を手に持つてぐるりと廻すと、太陽が三十度ばかり元に戻った。

〔考察〕「淮南子」は、人が真義を尽くせば、その心は天をも感動させ、両者は共鳴できることを説く一例として挙げられたもの。当歌の第三句「玉ほこ」は「道」にかかる枕詞で、「ほこ」に「戈」を掛ける。

（吉岡真由美）

惜春似友

86と、まらぬ恨を春にかくしてもなをその人としたふ空かな

論語。匿^レ怨^ヲ而友^ニトスルハ其人^一ヲ、左丘明耻^レ之^ヲ。丘^モ亦耻^レ之^ヲ。

〔出典〕雪玉集、五九四番。論語、公冶長第五、一二〇頁。〔異同〕『新編国歌大観』『論語』ナシ。

〔訳〕 惜春、友に似たり。

（春が）とどまらない恨みを（過ぎ去る）春に隠しても、それでもやはり（春を）恋人のように慕う空であるなあ。論語。心の底に怨みを抱きながら表面だけ友達づきあいをするのは、左丘明は恥じたというが、私もまた、これを恥ずかしいと思う。

〔考察〕『論語』の公冶長篇では、孔子の門人及び古今の人物評が収められ、孔子が弟子たちの賢否・得失を語りながら、その信ずるところを述べている。

暮春盃

(風岡むつみ)

87人ならはともに涙のわかれちにす、めやせまし春のさかつき

白氏文集。酔_テ悲_ノ涙_灑春_坏中_二。

〔出典〕雪玉集、六一一番。白氏文集、卷一七、律詩、十年三月三十日別_二微_之於_二澧_上、十四年三月十一日夜、遇_二微_之於_二峡中_一、停_二舟夷陵_一、三宿而別。言不_レ尽者以_レ詩終_レ之。因賦_二七言十七韻_一以_レ贈、且欲_下記_三所_レ遇_二之地与_二相見之時_一、為_中他年会話張本_上也。一二三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『白氏文集』「酔悲涙灑春坏中―酔悲灑涙春盃裏」。

〔訳〕 暮春の盃

(もし春が) 人ならば、一緒に涙にくれる別れ路で勧めようか。春の杯を。

白氏文集。酔_テ悲_シみの涙を、春の杯の中にそそぐ。

〔考察〕『白氏文集』は元和十年三月三十日、白居易が澧水のほとりで元微之と別れたが、四年後の三月十一日夜、長江の峡谷で偶然再会し、舟を夷陵に停めて三泊したのち再び別れ、その時語り尽くせなかつたことを書き、再び逢った時の話の種にしようとの思いから白居易が作った詩。

〔参考〕「御土器_{かほら}まゐりて、「酔_よひの悲_{あは}しび涙_{なみだ}灑_{そそ}く春_{はる}の盃_{さかづき}の裏_{うち}」ともろ声に誦じたまふ。」(『源氏物語』須磨、二二五頁)。

(風岡むつみ)

暮春

88 おもかけを花に忍へは鳥もいま入ぬる雲の行多かなしも

〔出典〕雪玉集、五九九番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 暮春

春の面影を花に見つけてなつかしんでいると、鳥もまさに今、雲の中へと姿を消してしまい、その行く先に心を引かれるなあ。

〔考察〕 歌題の「暮春」は、春の終わりの三月の異称。当歌は、91番歌に引用されている『和漢朗詠集』の「鳥入雲」の表現を用いて、過ぎ去る春を惜しんだもの。

（城阪早紀）

89 雲に入わかれを鳥に恨ても音にもやたてん春のくれかた

〔出典〕雪玉集、三三七二番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 暮春

雲に入っていく鳥との別れを恨んでも、もう鳴き声も聞けず、声に出して泣くこともできないだろう、春の暮れ方よ。

〔考察〕 当歌も88番歌と同様に、「鳥入雲」を踏まえる。第四句「音にもやたてん」の「音」は、鳥の鳴き声と人の泣き声を表わす。

（城阪早紀）

春帰日復暮

90 くれにけり春よいつくにゆく鳥の入相のかねの峰のしら雲

〔出典〕雪玉集、三〇六九番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 春は過ぎ去り、日はまた暮れる

春は暮れてしまったなあ。春はどこに行き、鳥もどこへ行ってしまったのか。暮れ方の鐘が聞こえる山の頂にかか
る白雲の中に入ったのだろうか。

〔考察〕 歌題は『白氏文集』巻第十「送春」の冒頭部分、「三月三十日 春帰日復暮 惆悵問春風 明日応不住（三月

三十日、春が過ぎ去り、日がまた暮れていく。私は悲しみて胸がいっぱいになって春風に尋ねてみた。おまえはき
つと明日の朝はここに留まってはいいのだろうか、と。）」の一節による。「いづくにゆく」の主語は春と鳥、「鳥
の入相のかね」に「鳥の入」（鳥が雲の中に入る）と「入相の鐘」を掛ける。

（城阪早紀）

三月尽夕

91 鳥もみな雲に入日の影きえてむなしき春を猶やなかめん

朗詠集。留^ル春不^レ用^ニ関城ノ固^ヲ、花^ハ落^テ随^レ風^ニ鳥^ハ入^レ雲。

〔出典〕雪玉集、六一六番。和漢朗詠集、上、春、三月尽、五五番。〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 三月末日の夕べ

鳥もすべて雲の中に入り、夕日の光も消え、何もなくなってしまうた春を、それでもやはり眺めようか。

和漢朗詠集。過ぎゆく春を引きとめるには、関所や城門の固めは何の役にも立たない。花は風のまにまに落ち
尽くし、鳥は雲の彼方に姿を消して(鳴き声も聞こえなくなつて)しまふ。

〔考察〕「雲に入日」に「(鳥が)雲に入る」と「入日」を掛ける。61番歌、参照。

(城阪早紀)

三月尽

92よもすからおきゐてしたへ暁のかねよりさきは猶春そかし

賈嶋。三月正当三十日、風光別ル。我ガ苦吟ノ身ニ共ニ君ト今ヲ夜不レ須レ睡ルコトヲ、未レ到ニ暁鐘ニ猶ラ是ラ春。

〔出典〕雪玉集、六五九一番。賈浪仙長江集(和刻本漢詩集成)卷一〇、三月晦日贈劉評事。

〔異同〕『新編国歌大観』「さきは―前は」。『和刻本漢詩集成』ナシ。

〔訳〕 三月末日

(三月最後の日には) 一晩中起きていて春を愛惜しなさい。夜明けの鐘が鳴るより前は、まだ春なのだから。

賈嶋。三月のちようど三十日。春の美しい自然のながめに別れを告げた。苦心して詩を作っている我が身は、
あなたと一緒に今宵は眠らないでいよう。まだ夜明けを知らせる鐘の時刻になつていないので、まだなお春の
季節なのだから。

〔考察〕当歌は、夜が明けて四月になれば夏になるので、三月最後の夜は春を愛でて眠らないでいよう、という賈浪
仙の詩を踏まえて詠む。

(松井佑生)

夏部

首夏

93 南よりかほりにけり花さそふ風のやとりやそなた成らん

南風歌。南風之薰兮可_三以解_三吾_カ民_ノ之愠_ヲ。

〔出典〕三玉和歌集類題、夏、首夏。円機活法、卷一、天文門、夏風。

〔異同〕『三玉和歌集類題』ナシ。『円機活法』「吾民之愠―吾民之愠兮」。

〔訳〕 夏の初め

南から夏のかおりが吹いてきたなあ。春の花を散らす風が今夜泊まるのは、そちらになるだろうか。

南風の歌。そよそよと吹きくる南風よ、それはわが民の怒りも、ときほぐしてくれる。

〔考察〕当歌は、花を散らせてしまう南風を擬人化し、南風の宿があなたの所である、と詠んでいる。引用されている漢詩は「南風之時兮可_三以阜_ニ吾_ニ民_ノ之財_ニ兮」（時をたがわず吹きくる南風よ、それはわが民の財を豊かにしてくれる。）と続き、王者徳治の理想を示す。

〔参考〕「花散らす風のやどりは誰か知る我に教えよ行きて恨みむ」（古今集、二、春下、七六、素性）。

（松井佑生）

首夏朝露

94 花にあかぬたか涙をかそ、くらん青葉露けき朝ほらけ哉

『三玉挑事抄』注釈 春部（下）・夏部

杜詩。感^レ時花^ニ 濺^レク^ハ涙^ヲ。

〔出典〕三玉和歌集類題、夏部、首夏朝露。杜律集解（和刻本漢詩集成3）、卷一、春望。

〔異同〕『三玉和歌集類題』『杜律集解』ナシ。

〔訳〕 夏の初めの朝露

春の花に名残を惜しみ、誰が涙を流しているのだろうか。初夏の青葉が露に濡れている明け方であるなあ。

杜甫の詩。世のありさまに感じては、花を見ても涙をそそぐ。

〔考察〕杜甫の詩では、平素は楽しむべきものである花も、国が荒れた状況下で見れば、涙が流れると詠む。当歌は、初夏の朝の青葉についた露を、春を名残惜しく思う人の涙になぞらえている。

（松井佑生）

更衣

95夏ころもよしや卯花橘の色もにほひも染てきましを

桃花薬葉云、下襲色、卯花同^レ柳。盧橘、表朽葉、裏青、五月云云。

〔出典〕雪玉集、六八七番。桃花薬葉（史籍集覧）、胡曹抄、夏冬下襲色事。

〔異同〕『新編国歌大観』「色もにほひも―にほひもいろも」。『桃花薬葉』ナシ。

〔訳〕 衣替え

夏の衣にもし卯の花や橘の色だけでなく、匂いも染めて着られたらなあ。

桃花薬葉によると、下襲の色で、卯花襲は柳襲に同じ。橘襲は表が朽葉色、裏が青色、五月の色である云々。

〔考察〕当歌は、夏の衣の色である卯花や橘を、視覚だけではなく嗅覚でも楽しみたいと詠んだもの。

〔参考〕『桃花薬葉』は一条兼良が、家督を継いだ子息冬良に与えた遺誡の書。文明一二年（一四八〇）成立。一卷。内容は、装束着用方式、相伝の文書など多方面にわたる。当歌の注釈は『桃花薬葉』と合わせて収録された『胡曹抄』からの引用（『改定 史籍集覧』27、二八七頁）。

傾心向日葵

（牛窓愛子）

96 君をあふく心をとほ、あふひ草むかふ日影をさしてこたへん

説文曰、黄葵常^ニ傾^レ葉^ヲ向^レ日^ニ不^レ令^レ照^ニ其^ノ根^ヲ。

〔出典〕雪玉集、三〇七三番。円機活法、一九卷、百花門、黄葵。〔異同〕『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

〔訳〕向日葵に心を傾ける

君主を敬う私の心を問うならば、向日葵が向かう太陽を指さして答えよう。

説文解字によると、向日葵は常に葉を傾け太陽に向かい、その根を日光に照らさない。

〔考察〕当歌は君主を敬う心を、太陽に向かう向日葵に見立てて詠んだもの。「葵傾」は君主の徳を仰ぎ慕う例え。

〔参考〕「説文」は『説文解字』の略で、中国の現存する最古の字書。一五卷。後漢の許慎の著。永元一二年（一〇〇）成立。なお、『説文解字』（四庫全書）には該当する本文は見られないが、後世の著書には「説文」にあるとされる。

（牛窓愛子）

夏歌中

97階のもの花もこそさけ卯花のわれのみ夏の折えかほなる

白氏詩。階_レ底_ノ薔薇_ハ入_レ夏_ニ開_ク。

〔出典〕雪玉集、七六八〇番。白氏文集、卷一七、薔薇正開、春酒初熟。因招劉十九・張大・崔二十四同飲。五七頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕 夏歌の中

階段のものとの薔薇は勢いよく咲くだろうが、夏になって卯花は自分だけがいかにも人に手折ってもらえる、といった様子で咲いている。

白居易の詩によると、階段のものとの薔薇は夏に入ると勢いよく咲く。

〔考察〕当歌は白居易の詩の勢いよく咲く薔薇を詠みこみながら、卯の花が他の花を圧倒して勝ち誇って咲いている様子を詠む。

(牛窓愛子)

98わすれては小野の細道ふみ分し雪かとおもふさける卯花

いせ物語云、むつきにおかみ奉らんとて、小野にまふてたるに、ひえの山の麓なれば、雪いと高し。しゐて、みむろにまふて、おかみ奉るに云々。下略。わすれては夢かとおもふ思ひきやゆきふみ分て君をみるとは

〔出典〕雪玉集、三七七六番。伊勢物語、八三段。〔異同〕『新編国歌大観』『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 (夏歌の中)

ふと現を忘れては、小野の細道を踏み分けた雪か、と見間違えそうなほど、卯の花が咲いているなあ。

伊勢物語によると、正月に拝謁申し上げようとして、小野に参上したところ、比叡の山の麓なので、雪がたいそう高く積もっている。雪の中をおしてご庵室に参上して拝顔申し上げると云々。下略。いまのお姿を拝している、ふと現を忘れては、夢を見ているのではないかという気がします。深い雪を踏みわけて、このような所でわが君にお逢いしようとは、思ってもみませんでした。

〔考察〕『伊勢物語』は、惟喬親王が出家してしまい、親密に交遊していた馬の頭が正月に拝謁しようと小野に参上する場面。当歌は、小野に雪がたいそう高く積もっている様子を踏まえ、白い卯の花が雪と見間違えそうになるほど咲いている様を詠む。

〔参考〕「わすれてはいづれのとしの雪ぞともわかぬ籬やさける卯のはな」（雪玉集、六九八番）。

（植田彩郁）

菖蒲草

99 柏玉ちかやふくむかしの宿をわすれすはねなから軒のあやめをもみん

事文類聚続集。堯之有「天下」也、堂高三尺采椽不_レ剝茅茨不_レ剪。

〔出典〕柏玉集、四九四番。古今事文類聚（四庫全書）、続集卷五、堯土階。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『古今事文類聚』「采」采「剝」剝。

〔訳〕 菖蒲草

茅葺屋根の昔の住処を忘れなければ、寝ころびながら軒の菖蒲も根が付いたまま見られるだろう。

事文類聚続集。堯が天下に王であったときは、建物で、高さが三尺あるいちい(の木の材の)の垂木たるきにかんなもかけず、茅葺屋根の端も切りそろえなかつた。

〔考察〕端午の節句には、邪気を払うために菖蒲や蓬を軒に挿す風習がある。また、歌合のように左右に分かれ、菖蒲の根の長短を競う「根合」という遊戯も行なわれる。当歌の第四句の「ねなから」は「寝ねがら」と「根ながら」の掛詞。

〔参考〕『古今事文類聚』は宋の祝穆編、古今の群書の要語・事実・詩文を集め分類した中国の類書。『韓非子』の「五蠹第四十九」にも、「堯之王天下也、茅茨不翦、采椽不斲」の記述が見られる。

(植田彩郁)

夏歌中

100声をなをいかにか忍ふほと、きす血のなみたにもなくとこそきけ

格物論曰、杜鵑、一名ハ杜宇、一名ハ子規。三四月ノ間夜鳴達旦。其ノ声哀ニシテ而吻ニ有レ血、漬ニ草木ヲ。初テ聞ク人、則有ニ離別ノ之苦。唯、田家俟ツテ其鳴ヲ興ス農事ヲ。其ノ音、不如婦云云。

〔出典〕雪玉集、七一九〇番。円機活法、卷二四、子規。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。「夜鳴達旦―夜啼達旦」「初聞人―初聞」「唯―惟」「農事―農事或以為啼苦則自懸於樹」「自呼謝豹思婦楽」「不如婦云云―不如婦去」。

〔訳〕 夏歌の中

まだ声をどのようにひそめて鳴いているのだろうか、ほととぎすよ。血の涙を流して鳴くとも聞かぬが。

格物論によると、杜鵑は、別名を杜宇、子規と言う。三月と四月の間、夜中に鳴き、朝まで続く。その声は憂いを帯びており、吻くちくちには血がついており、血で草木をひたす。初めて杜鵑の声を聞く人は、離別の苦しみがあると感じる。ただ、田舎では杜鵑が鳴くのを待つて農事を始める。その音は、不如帰と云々。

〔考察〕当歌は、ほととぎすの離別の苦しみを感じられる鳴き声や血がついているかのような口ばしを踏まえ、声をひそめて鳴くほととぎすに思いを馳せている。

市郭公

(植田彩郁)

101さはきたつ市をやをのか忍ひ音のかくれ家に鳴山ほと、きす

高士伝曰、毛公薛公遭_二戦国_一之乱_二。二人俱_二以_二処士_一、隠_二於邯鄲_一市_一。毛公隠為_二博徒_一、薛公_ハ隠_二於壳膠_一云云。

〔出典〕雪玉集、七三五番。古今事文類聚、続集、卷三、関市、隠於市。

〔異同〕『新編国歌大観』「をのか―おのが」。『古今事文類聚』ナシ。

〔訳〕 市の郭公

山ほととぎすは（毛公と薛公のように）騒がしい市場を、自分の人目を忍ぶ隠れ家にして、声をひそめて鳴いているのだろうか。

高士伝によると、毛公と薛公は戦国の乱世に遭遇した。ふたりはともに教養がありながら官に仕えない者であり、趙の首都である邯鄲の市の中に身を隠していた。毛公は博徒の中に隠れ、薛公は膠売りの中に隠れていた

云云。

〔考察〕右の漢文は『高士伝』には見当たらない。しかし『史記』卷七七魏公子列伝のなかで、魏の信陵君という人物が大変明敏で慈悲深く、徳の高い人物であったことを表す逸話のひとつに、市の中に隠れていた毛公や薛公など、の在野の賢人たちに信陵君が自ら会いに行き、身分を問わず交際を持ったとある。当歌は市の中に身を隠す賢者に、ひっそりと初音を告げるほととぎすを重ねたもの。「忍び音」の意味は、人知れず声をおさえて泣くこと、また、ほととぎすがまだ声をひそめるようにして鳴く初音のこと。

〔参考〕右の漢文と本文が完全に一致するのは、管見の及ぶ限りでは『古今事文類聚』だけなので、底本が寛文六年（一六六六）刊行の訓点付和刻本である『新編古今事文類聚』を出典に挙げた。

（吉岡真由美）

郭公声老

102 ほととぎすかへる山路のいまはとや声も老木の雲うつむ空

三昧詩。香山館_ニ聴_ニ子規_一詩。雲埋_ニ老樹_一空山_ヲ裏、彷彿千声一度飛。

〔出典〕雪玉集、七三七番。三昧詩（国訳漢文大成）、竇常、香山館聴子規。

〔異同〕『新編国歌大観』「老木―老樹」。『三昧詩』ナシ。

〔訳〕 郭公の声、老いる

ほととぎすが帰っていく山道に、「今は（もうこれでお別れだ）」と鳴く声も老いて、老木が雲に埋もれた空に響くなあ。

三昧詩。香山館でほととぎすの声を聴く詩。うっそうと茂る古木が雲につつまれている人気のない山にこだま
して、さながら、数知れぬ鳴き声が一時に飛びたつたかのようだ。

〔考察〕ほととぎすは蜀魂の故事を踏まえて、死出の山から来てなく鳥とも称された。当歌の「声も老木」に「声も
老い」と「老い木」を掛ける。

(吉岡真由美)

暁月郭公

^柏103雲にあふ暁月のほと、きすあらぬ光をそふる声かな

古今序の詞。春の部に見えたり。

〔出典〕柏玉集、四七三番。〔異同〕『新編国歌大観』「暁月郭公―暁月聞郭公」「そふる声かな―わぶる声かな」。

〔訳〕 暁月の郭公

夜明け前の月は雲に覆われたが、ほととぎすの鳴き声は（雲に覆われて）あるはずもない月の光を添えてくれるな
あ。

古今集の仮名序の詞。春の部にすでに見える。（57番歌、参照）

〔考察〕古今集序は喜撰の歌風の曖昧さを、いつの間にか暁の雲に覆われた秋の月に例えた一節である。

〔参考〕当歌は結句の本文に異同がある。「わぶる声かな」の場合、現代語訳は、「夜明け前の月が雲に覆われ、月の
光も消えてしまい、心細く思つて鳴くほととぎすの声だなあ。」となる。

(吉岡真由美)

五月雨

104はれまなき心の中の八重葎軒をあらそふさみたれの頃

蓬生の巻。浅茅は庭の面も見えず茂り、蓬は軒をあらそひて、おひのほる。葎は、西ひんかしのみかとを、とちこめたるは、たのもしけれど云々。

〔出典〕雪玉集、四五〇七番。源氏物語、蓬生、三三九頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『承応』「茂りしげき」「とちこめたるはとちこめたるぞ」。『湖月抄』「とちこめたるはとちこめたるぞ」。

〔訳〕 五月雨

晴れ間のない心の中は、八重葎が軒と争うまで高く生えあがる五月雨の頃のよう(に陰鬱)であるなあ。

蓬生の巻。浅茅は庭の面も見えぬくらいに生い茂り、繁茂する蓬は軒と争うまで高く生えあがる。葎が西と東の御門を閉じ込めているのは、心丈夫であるけれども云々。

〔考察〕蓬生の巻は、末摘花の邸宅の荒廃ぶりを述べた場面。伸び放題の葎が門を閉ざすことは、和歌にもよく詠まれる。当歌はそれを踏まえ、心が晴れず泣き暮らしているさまを、梅雨が降り続き晴れる間がなく、生い茂る葎で閉ざされた状況に例えたもの。

(大八木宏枝)

砌橋

105ほと、きすをのかとこよの木末そとうへしはしるや庭の橋

日本紀、垂仁天皇。九十年春二月庚子朔、天皇命田道間守遣常世国、令求非時香菓。今謂橘是也。十九年秋七月戊午朔、天皇崩於纏向宮。時年百四十歲。冬十二月癸卯朔壬子、葬於菅原伏見陵。明年春三月辛未朔壬午、田道間守至自常世国。則寶物也、非時香菓八竿八縵焉。

〔出典〕雪玉集、七四五番。日本書紀、卷第六、垂仁天皇、三三四頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『日本書紀』「非時香菓トキシクノカクノミヲ非時香菓香菓、此云」箇俱能未。「寶齋」。

〔訳〕 軒下の橘

ほととぎすは、庭に植えた木の梢を自分の寢床にしているが、それは常世の国から伝わった橘であることを知っているだろうか。

日本書紀、垂仁天皇。九十年春二月の庚子朔（一日）に、天皇は田道間守に命じられ、常世国に派遣して、非時香菓を求めさせられた。今、橘というのはこれである。九十九年秋七月の戊午朔（一日）に、天皇は纏向宮で崩御された。時に御年、百四十であった。冬十二月の癸卯朔の壬子（十日）に、菅原伏見陵に葬りまつた。翌年春三月の辛未朔の壬午（十二日）に、田道間守は常世国から帰って来た。その時、持ち帰って来た物は、八竿八縵の非時香菓であった。

〔考察〕田道間守が常世国から持ち帰った「非時香菓」は橘の実であり、「八竿八縵」の「竿」は串刺しにした物の助数詞、「縵」は葉のついたままの物の助数詞。和歌の世界では、ほととぎすは橘に宿るとされた。「をのがとこよ」に「己が床」と「常世」を掛ける。「寶物」に「モチマテモ」という訓が付けられているが、意味不明。『日本書紀』のある伝本（寛永九年版など）には、「モチマテイタルモノ」とあり、それが一部欠落したかと考えられる。

早苗

106うへわたす鳥羽田のさなへはるか成みとりや洞の名を残すらん

碧洞の二字、からのふみには、いまたかうかへ侍らす。

本朝文粹、卷十。紅櫻花下作ニスル太上法皇製ニ詩序。後江相公。臣等少シテ忽ニ出ニ紅塵ノ之境ヲ、得レ入ニルコトヲテ碧洞ノ之中ニ云云。

〔出典〕雪玉集、七五五番。本朝文粹、卷一〇、二九三番。〔異同〕『新編国歌大観』『本朝文粹』ナシ。

〔訳〕 早苗

鳥羽の田んぼ一面に植えられた早苗が、遠くまで広がっている。その緑は、碧洞の名声を後世に留めているのだからか。

〔碧洞〕の二文字は、漢籍ではまだ調べがついていません。

本朝文粹、卷十。紅櫻花の下で太上法皇の製に依じて作る詩の序。大江朝綱。私たちはしばらくして、そのまま俗世の煩わしさから脱して、超俗的な世界に入ることができた云々。

〔考察〕「紅塵」の意味は「浮世のちり。俗世のわずらわしさ。俗塵。」「碧洞」はそれと対比させて超俗的な世界として用いられたと思われる。「かうかへ(考へ)」は、物事を引き比べて調べること。当歌は漢詩を踏まえて、一面に広がる早苗の緑の美しさを碧洞に例え、かつての碧洞の名声は鳥羽田に偲ばれると詠んだもの。「鳥羽田」は歌枕で、京都市南部の鳥羽の田んぼ。鳥羽には鳥羽上皇の離宮があった。

池蓮

(風岡むつみ)

107 水柏ちかくうつめはまさる一くさの匂ひもこれか池のはちすは

梅か枝の巻。右近の陣のみかは水の辺になすらへて、西のわたとの、したより出るみきはちかふうつませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉、ほりてまいれり云々。

〔出典〕 柏玉集、五八〇番。雪玉集、四五一六番。源氏物語、梅枝巻、四〇八頁。

〔異同〕 『新編国歌大観』 『湖月抄』 ナシ。『承応』 「うつませたまへるを―うつませたまへるに」。

〔訳〕 池の蓮

水の近くに埋めたので深まっている一種の薫物の匂いも、これなのかと思う、池の蓮の花（の香り）だなあ。

梅枝巻。右近衛の陣の御溝水の近くに埋めて置く例にならって、西の渡殿の下から流れている遣水の汀近くに埋めさせておおきになったのを、惟光の宰相の子の兵衛尉が掘り出して持って参った云々。

〔考察〕 『源氏物語』 は六条院で行われた薫物合せの場面で、遣水の水際に埋めておいた薫物を光源氏が取り出させた箇所である。薫物は湿気のある土の中に埋めておくと、匂いが深まる。六種むくさの薫物の一つに「荷葉かえふ」（蓮の葉という意）があり、蓮の花の香に似せている。当歌はその蓮葉と、池に浮かぶ蓮の花の匂いを対比させて詠んだもの。

(風岡むつみ)

閑庭瞿麦

108 おしむへきとなりもしらぬ庭の面やひとりのための床夏の花

『三玉挑事抄』 注釈 春部（下）・夏部

古今集云、隣よりとこ夏の花をこひにおこせたりければ、おしみて此歌をよみてつかはしける。躬恒。塵をたにすへしとそ。

〔出典〕雪玉集、六九九九番。古今集、卷第三、夏歌、一六七番。〔異同〕『新編国歌大観』『古今集』ナシ。

〔訳〕 閑静な庭のなでしこ

花をやることを惜しむに違いない隣人も知らない、庭の面に咲く、私一人のための常夏の花であるなあ。

古今集によると、隣の家から常夏の花を所望する由を申し入れてきた時、花をやるのが惜しかったので、代わりに詠んで贈った歌。凡河内躬恒、この花には塵一つ積もらせまいと。

〔考察〕 凡河内躬恒の和歌は、「塵をだにす多じとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝るとこ夏の花」。「瞿麦」と「常夏」は同じ花。

（風岡むつみ）

螢

109とふほたるあつめをかははかなくや火をとる虫の尋ねよらまし

晋書。車胤、字武子、南平ノ人、恭勤不_レ倦、博覽多通。家貧_ク不_ニ常_ニ得_レ油_ヲ。夏月_ニハ_ハ則_レ練囊_ニ盛_ニ數十_ノ螢_一以_テ照_レ書_ヲ、以_テ夜_ヲ繼_レ日_ニ。

陳去非詩。陽光不_ニ照_レ臨_一、積陰生_ニ此_ノ類_ヲ。非_レ無_ニハ_ハ惜_レム死_ヲ心_一、素有_ニ賊_レ明_ヲ意_一。粉_ハ穿_テ紅_ヲ焰_ヲ焦_レ、翅_ハ撲_ツテ蘭_ヲ膏_ヲ沸_ク。為_レ汝_一傷_レ嗟、自_ラ棄_テ非_ニ天_ノ棄_ルニ。

〔出典〕雪玉集、三三三八〇番。晋書、列伝第五三、車胤。陳去非、火蛾、古今事文類聚、続集、卷一八。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『晋書』「南平人―南平人也。曾祖浚、吳會稽太守。父育、郡主簿。太守王胡之名知人、見胤於童幼之中、謂胤父曰、『此兒当大興卿門、可使專学』。胤」。『古今事文類聚』「汝―爾」。

〔訳〕 螢

飛んでいる螢も集めて置いてしまえば、つかの間の命であるなあ。(螢の光を灯火と間違えて) 火に飛びこむ虫(蛾) が集まり近寄ってくるだろう。

晋書。車胤は、字は武子で南平の人である。礼儀正しく慎み深い性格で、学問に飽きることなく、広く書物を読み物事に精通していた。家が貧しかったためにいつも油を買うことができなかった。夏には絹の袋に数十匹の螢を盛り、夜遅くまでその光によって書を照らし、夜もすがら勉強した。

陳去非の詩。太陽の光によって照らされることなく、陰の気が積もり積もってこの虫が生まれる。死を惜しむ心がないわけではないが、もとより火の中に飛び込む本性をもっているのだ。粉は赤い炎によって焦がれ、羽は灯の油によって焼かれる。私もおまえのために(おまえのことを) ひたすら悲しく思うが、(粉を焦がしたり、羽を焼いたりするのは) 自ら棄てたのであって(自分のせいであって)、天が見棄てたわけではないだよ。

〔考察〕『晋書』の引用部は、貧しいために灯火用の油が買えず螢を集めてその光で書を読んだ晋の車胤と、雪の明りて書を読んだという孫康の故事をもとにした「螢雪の功」として知られる。

〔参考〕陳与義(字は去非) は南宋の詩人、元版の『簡齋詩集』三〇巻が現存するが、出典とされる漢詩は収められていない。その詩は宋の祝穆によって編纂され、元代に刊行された『古今事文類聚』続集の巻一八にある。一方、

同じ詩が『全唐詩』巻六八一に韓偓の作と収録されている。おそらく祝穆が作者を間違えたのであろう。

「火を取る虫」または「火取り虫」は「火蛾」と同義。和歌の用例はきわめて少ない。「身をすつるひとりむしこそあはれなれなど後の世をかくはおもはぬ」(拾玉集、夏、六二五番)、「しらず我火をとる虫の生まれきてかかる思ひに胸こがすらん」(松下集、寄虫恋、一三七三番)。

(城阪早紀)

河螢

110 行水も涼しき影をとめきてや螢とひかふ中川の宿

帚木巻云、「中川のわたりなる家なん、この頃、水せき入て、涼しきかけに待る」ときこゆ。中略。かせ涼しくて、そこはかとなき虫の声くきこえ、螢しけく飛まかひて、おかしき程也云々。

〔出典〕雪玉集、七七六七番。源氏物語、帚木巻、九二頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 河の螢

流れて行く水も、涼しい影を尋ね求めてきたのだろうか。螢が飛び交う中川の宿に。

帚木巻によると、「中川のあたりの家が、近ごろ水を堰き入れて、涼しい木陰でございます」と申し上げる。中略。風が涼しくて、どこからともない虫の音が聞こえ、螢もしきりに乱れ飛んで、なかなかしやれた風情である云々。

〔考察〕『源氏物語』は、光源氏が方違え所として中川(京極川)のわたりにある紀伊守邸へ赴むいた場面。

(城阪早紀)

野亭螢火

山身をしるもはかなき野への草の庵にとふや螢の石の火の影

詠集。白居易。石火ノ光ノ中ニ寄^ス此身^ヲ。

〔出典〕三玉和歌集類題、夏、野亭螢火。和漢朗詠集、下、無常、七九一番。

〔異同〕『三玉和歌集類題』「螢の―螢も」。『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 野中の小家の螢

自分の身をはかないものだと知りながらも、野原の心細い草庵に飛ぶ螢は、火打ち石の火花のようだなあ。

和漢朗詠集。白居易。人生は石を打ち合わせて出るような短い一瞬の時間に生きているものだ。

〔考察〕『和漢朗詠集』の引用部は「蝸牛角上争何事（かたつむりの角の上のような狭く小さな所で、いったい何をあぐせくと争うのであろう。）」に続く一節。当歌は螢火を、火打ち石の火花に重ね合わせている。「はかなき」は「身を知らぬ」と「野辺の草の庵」に掛かる。

〔参考〕「身をしる」を詠みこんだ歌としては、「数々に思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞまされる」『伊勢物語』一〇七段がある。

螢似玉

小車の行かたてらせむは玉のよるの光も螢にぞ見る

十八史略曰、威王与^レ魏ノ惠王^ニ会^ス田于郊^ニ。惠王ノ曰、「齊有^レ宝乎」。王曰、「無^シ有^ルコト」。惠王ノ曰、「寡人^カ国

雖_レ小猶_テ有_リ徑_リ寸之珠照_ニ車_ノ前後各十二乗_テ者十枚_上」云云。

〔出典〕雪玉集、三四八四番。十八史略、卷一、春秋戦国、齊、九四頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「むは玉―うば玉」。『十八史略』ナシ。

〔訳〕 螢、玉に似る

珠よ、小車の行方を照らしなさい。闇夜に輝く珠の光は、まさに螢の光のように見える。

十八史略によると、齊の威王は、ある時、魏の恵王と城外の地で会合して狩をした。その時、恵王が威王に向かつて、「貴国には何か宝がありますか」と言った。威王は、「何もありません」と答えた。すると恵王は、「拙者の国は小さな国ではありますが、それでも直径一寸ばかりの珠で、車の前後それぞれ十二台ずつ、合わせて二十四台の距離を照らすものが十個あります」と言った云々。

〔考察〕「むば玉」は「夜」に掛かる枕詞だが、当歌では「玉（宝玉）」という意味も含む。

〔参考〕夜光を発する珠は、大伴旅人の「酒を讀むる歌」に「夜光る玉」（万葉集、卷三、三四六番）とあり、『源氏物語』では明石の姫君（松風の巻、四〇三頁）、『夜の寢覚』では石山の姫君（卷二、一五五頁）の容貌を「夜光りけむ玉」に例える。

（松井佑生）

夏歌中

113 秋をまたて下葉色つく木かくれに露をかなしむ蟬や鳴らん

古今序。かくてそ、花をめて、鳥をうらやみ、霞をあはれみ、露をかなしむ心、詞おほく。

〔出典〕雪玉集、七一九六番。古今集、仮名序、一八頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『古今集』「あはれみ―あはれひ」「かなしむ―かなしふ」。

〔訳〕 夏歌の中

秋を待たずに下葉が色づく木の陰には、露に（命のはかなさを思つて）なげく蟬が鳴いているのだろうか。

古今集仮名序。以来、花をほめ、鳥を慕い、霞に感じ、露にひかれる心は多感となり、歌は多く（なった）。

〔考察〕当歌の「露をかなしむ蟬」は、『古今集』仮名序の「露をかなしむ心」を踏まえて、露にひかれる心が蟬にもあると詠む一方、色づきはじめて葉に夏の終わりを予感した蟬が、残された命の短さを露のはかなさに重ね合わせている、と考えられる。

〔参考〕「木がくれ」「露」「蟬」を詠み合わせた例としては、「空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな」（源氏物語、空蟬の巻、一三二頁）がある。

（松井佑生）

蟬

114 蛩なく夕かけの秋かせも心にうかふせみの声かな

〔出典〕雪玉集、七七七一番。〔異同〕『新編国歌大観』「うかふ―かよふ」。

〔訳〕 蟬

きりぎりすが鳴く夕暮れの秋風の風情も、心に思っておこされる蟬の声であるなあ。

〔考察〕当歌は115番歌の漢詩を踏まえ、夏に鳴く蟬の声を聞いて、秋にきりぎりすが鳴く秋の風情を思い浮かべてい

る。

〔参考〕「きりぎりす(蛩)」は「こおろぎ(蟋蟀)」の古名。当歌の第一・二句は、「我のみやあはれとおもはむきりぎりすなくゆふかげのやまとなでしこ」(古今集、巻四、秋上、二四四番、素性法師)による。実隆も、「きりぎりすなく夕かげの花のうへも心にかへる庭のしら雪」(雪玉集、一七二三番)と本歌取りしている。

(牛窓愛子)

樹陰蟬

15 ひさうへし松も木高し年々の蟬のおもひは身にもしら南

白氏文集。相思夕上^{三ツテ}松台^{ニ立}、蜚^ノ思蟬^ノ声滿^レ耳^ニ秋。

〔出典〕雪玉集、三一七〇番。白氏文集、卷二三、題李十一東亭、九八頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『白氏文集』「蜚―蛩」。

〔訳〕 木陰の蟬

(小松を) 根ごと引き抜いて植え替えた松の梢も高くなった。それまでの多年に積み重ねられた蟬の思いを、松の木自身も知ってほしい。

白氏文集。君を偲んで夕暮れの松が生えた台地に立つと、今や秋たけなわ、蟋蟀^{こおろぎ}や蟬の悲しげな声が耳一杯に聞こえてくる。

〔考察〕当歌は樹齡の長い松と寿命の短い蟬を、対照的に詠む。

〔参考〕「蜚」は14番歌の「蛩」と同じ。本歌は「ひきてうゑし人はむべこそ老いにけれ松のこだかく成りにけるか

な」(後撰集、卷一五、雜一、一一〇七・一一〇八、みつね)。

嶺夕立

(牛窓愛子)

116 あつき日のあやしき峰と見し雲はさえてや雨の夕立の空

陶潜、四時詩。夏雲多奇峰。

〔出典〕雪玉集、七六五三番。円機活法、一之卷、天文門、雲。〔異同〕『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

〔訳〕 嶺の夕立

暑い日に珍しい峰の形のように見えた入道雲は、消えずに雨となり、夕立の空になるのだろうか。

陶淵明の四時詩。夏の雲は珍しい峰のような形で多く湧く。

〔考察〕当歌は「四時詩」にも夏の風物詩として詠まれた入道雲と、それから連想される夕立を詠み入れ、夏の情景を表したものの。

〔参考〕「四時詩」は現代では陶淵明の偽作とされるが『四庫全書 陶淵明集』には卷三末に収録されている。全文は以下の通り。「春水満四沢、夏雲多奇峰、夜月揚明輝、冬嶺秀孤松」。

沙月忘夏

(牛窓愛子)

117 秋ちかきまことの月や松に住鶴も霜夜の声をなくらん

阮籍、鶴賦曰、縞衣丹頂暁霜戒之註、鶴畏霜者也云云。

〔出典〕雪玉集、七七六五番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 砂に映る月影に、夏を忘れる

秋の気配が感じられる、真砂を照らす月よ。松に住む鶴も、(月光を浴びて輝く白砂を見て) 夜に霜が降りたのかと恐れて鳴いているのだろうか。

阮籍、鶴賦によると、「白い羽毛の丹頂は明け方の霜を警戒する」の注、鶴は霜を畏れるものである云々。

〔考察〕阮籍は、中国、魏・晋時代の人物で、竹林の七賢の一人。当歌は阮籍の鶴賦と、118番歌の白氏文集の内容を踏まえる。

〔参考〕阮籍の残した賦は、「東平賦」「元父賦」「首陽山賦」「清思賦」「彌賦」「鳩賦」の六つで、「鶴賦」は見当たらない。『円機活法』卷之二、天文門、霜の「鷓鴣畏」の項目には、「崔豹古今注、鷓鴣向日ニ飛テ畏ル霜ヲ。」と、鷓鴣(ミンサザイ)が霜を畏れる様子を記す。ちなみに『和漢朗詠集』卷上、冬、霜、三七〇〜三七二番歌には、鶴は露が降りると警戒して鳴くが、霜になると鳴かなくなる、と詠まれている。

(植田彩郁)

118 碧明やすき空にや夏を思ひ出るまさこの霜の深きよの月

白居易。月照ニ平ニ砂ニ夏ニ夜ニ霜。

〔出典〕三玉和歌集類題、夏、沙月忘夏。白氏文集、卷二〇、律詩、江楼夕望招客、四〇八頁。

〔異同〕『三玉和歌集類題』「出る―出ん」「まさこ―沙」。『白氏文集』ナシ。

〔訳〕 (砂に映る月影に、夏を忘れる)

すぐに明けてしまう空に夏を思い出すだろうか。真砂を霜のように照らす深き夜の月よ。

白居易。月に照らされた一面の川砂は、夏の夜の霜のように白く光っている。

〔考察〕白居易の詩は、江楼から眺めた夕暮れの絶景に、客を招いて共に涼を楽しもうとした様を詠んだもの。「風吹ニ古木ニ晴天雨 月照ニ平沙ニ夏夜霜一」は、大江維時『千載佳句』上、夏夜、藤原公任『和漢朗詠集』上、夏、夏夜などに収録され、日本文学に大きな影響を与えた。

(植田彩郁)

夏月

119中に有かつらや宿り吹風も月の光を出て涼しき

酉陽雜俎云、月ノ桂、高キコト百丈、下ニ有ニ一人一、常ニ斫レ之ヲ、樹ノ創随テ合フ。

〔出典〕雪玉集、七八五番。酉陽雜俎（四庫全書、卷一。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『酉陽雜俎』「高百丈―高五百丈」。

〔訳〕 夏の月

月の中にある桂の木陰に宿ってから吹いてくるので、月の光に照らされた風も涼しいのだろうか。

酉陽雜俎によると、月の桂の高さは百丈で、下に一人いて、常にこれを伐っており、樹の傷はその度ごとに合わさつてしまう。

〔考察〕『酉陽雜俎』は中国唐代の子部の小説類の一つで、八六〇年頃成立とされ、仙仏人鬼から動植物に至るまでの広範な怪奇異聞を、三六の部立に分けて随筆風に叙述したもの。当歌は仙術を学んだ罪で、月の中にある桂の木を

切り続けている呉剛という男の伝説を踏まえて、桂の木に吹く風を詠んだもの。

(植田彩郁)

夏月透竹

120 柏 した風の涼しかるへき心をも月に見えぬる庭の呉竹

乙女巻。御まへ近き前栽、くれ竹、した風涼しかるへく云々。

〔出典〕柏玉集、五五七番。源氏物語、少女巻、七九頁。〔異同〕『新編国歌大観』「庭―夏」。『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 夏の月、竹を透す

庭の呉竹の下を涼しく吹き通う風の情趣も、夏の明るい月には見えてしまふなあ。

少女の巻。御前に近い植え込みは、呉竹を下風が涼しく吹き通うように植えて云々。

〔考察〕『源氏物語』は、光源氏が四町にわたる広大な六条院を完成させた場面。四町は四季を象徴し、該当箇所は夏の木陰の趣を主とした花散里の住まい。

(吉岡真由美)

遠村蚊遣火

121 同 たか里に山をもおへる蚊遣火のけふりのうへは峰の白雲

莊子。応帝王云、其於治天下也、猶涉海鑿河、而使蚊負山也。

〔出典〕柏玉集、五六八番。莊子、応帝王、二八〇頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「たか里に―この里や」。『莊子』ナシ。

〔訳〕 遠村の蚊遣火

誰の里で、山を背負っている蚊がいるのだろうか。蚊を燻す蚊遣火の煙の上には、峰に白雲がかかっているよ。

莊子。応帝王によると、天下を治めることは、海を歩いて渡ったり、地面を掘って大河を作ったりするほど（危険を伴う困難なこと）だ。（それを人為によって治めようとするのは）蚊に山を背負わせるようなものである。

〔考察〕『莊子』の「応帝王」では、人為による天下平治の困難を述べ、君主も政治も無為が良いと説く。

（吉岡真由美）

夏草

122 雲かゝる山とみるまで茂る也ふもとのちりの野への夏草

古今。高き山も禁のちりひちよりなりて、あま雲たなひくまでおひのほれることくに云々。

〔出典〕雪玉集、三三七八番。古今集、一九頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『古今集』「のほれることくーのほれるかことく」。

〔訳〕 夏草

雲がかかる山に見えるほど茂っているようだ。山裾の塵の野原の夏草は。

古今集。高い山も麓の塵や泥土の集積から、空の雲のたなびく高さまで成長するように云々。

〔考察〕『古今集』仮名序は、歌が興り今日に至るまで発展したさまを例えた一節。当歌はそれを踏まえて、夏になり勢いよく生い茂る野辺の草々の生命力を詠む。

(吉岡真由美)

夏草滋

123 おもふそよ夏野の外も道しなき我をいさめの草はいかにと

杜律。晚出^ツ左腋^ヲ詩曰、避^レ人焚^ニ諫草^ヲ、騎^レ馬^ニ欲^ス雞栖^{シト}。

〔出典〕 柏玉集、五三三番。杜甫集註（和刻本漢詩集成4）、卷一七、晚出左掖。

〔異同〕 『新編国歌大観』「夏草滋―夏草深」。『杜詩集註』「晚出左掖―晚出左掖」。

〔訳〕 夏草が茂る

思うことだよ。夏の野原（には草が生い茂り、道が見えないが、そ）の外にも道がなく、道を踏み外した私を諫める草稿はどんなにあるかと。

杜甫の律詩。晩に門下省を退庁する詩によると、人目を避けて草稿を焼き、帰宅の馬にまたがれば、それは鶏がねぐらに帰ろうとする時間だった。

〔考察〕 諫草とは、皇帝への諫言を下書きした草稿で、それを人目に触れないところで焼く様子が詩に詠まれている。当歌は「道」に道路と道徳を掛ける。

(風岡むつみ)

124 ましりなは麻もかへりていかならん心のまゝに茂るよもきに

荀子曰、蓬生^ニ麻^ノ中^ニ、不^レシテ扶^ケ自直^シ。

〔出典〕 雪玉集、六六〇一番。荀子、卷第一、勸学篇第一、二二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『荀子』「不扶自直―不扶而直」。

〔訳〕（夏草が茂る）

思いのままに茂る蓬の中に混じってしまったならば、（まっすぐにのびるはずの）麻も却ってどうなるだろうか。

荀子によると、蓬は（低く地面に広がる草であるが）麻の茂みの中に生えると、つかい棒を立てなくても、まっすぐに上に伸びる。

〔考察〕『荀子』は学問をする際には、その拠るところの信頼性をまず確かめる必要があると述べている。

〔参考〕前漢の儒者、戴徳編『大戴礼』^{だたいれい}には、『三玉挑事抄』と同じ本文が収録されている。

（風岡むつみ）

扇

125たとへても光やは有入月の跡にかひなきあふきとそみる

摩訶止観文。月隠^{レヌレハ}重山^ニ兮^{ケテ}拳^{レテ}扇^ヲ諭^{レフ}之^ヲ。

〔出典〕雪玉集、四二七六番。和漢朗詠集、卷下、仏事、五八七番。〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕扇

（扇を月に）例えたとしても（扇に月のような）光はあるだろうか。月が山辺に隠れたあとでは、甲斐のない扇と見ることだなあ。

摩訶止観文。真理を象徴する月が、重なり合った深山に隠れてしまうと、扇をさし上げ月に例えて示し教える。

〔考察〕摩訶止観文は月を真理に、重山を煩惱にたとえ、身边にあるものを借りて深遠な教理を解くことの大切さを述べている。

〔参考〕『摩訶止観』には「月隠重山拳扇類之」とあり、『和漢朗詠集註』の本文とは異なる。

（風岡むつみ）

納涼

126からころもひもときさけて夕涼み月もいつみにむかふ涼しさ

とこなつの巻。風はいとよくふけども、日のとかに、くもりなき空の、にし日になる程、蝉の声なども、いとくるしげにきこゆれば、「水のうへ、むとくなる、けふのあつかはしさかな。むらいのつみは、ゆるされんや」とて、よりふしたまへり。「いとかゝる頃は、あそひなともすさましく、さすかにくらしかたきこそ、くるしけれ。宮つかへするわかき人々、堪かたからんな。帯ひも、とかぬほとよ。こゝにてたに打みたれ」云々。

〔出典〕雪玉集、八四一番。源氏物語、常夏巻、一二三頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 納涼

（泉のそばで）衣の紐を解きほいて夕涼みをする、月も（涼しさを求めて）泉に向かっていくほど涼しいなあ。常夏巻。風はともよく吹くが、日も長くて雲一つない空がやがて西日になるころには、蝉の声などもじつに暑苦しく聞こえるので、（源氏は）「水のそばもいっこうに役に立たない、今日の暑さだなあ。不作法な格好になっても許してもらえるかな」とおっしゃって、物に寄りかかって横になつていらっしゃる。（源氏は）「まっ

たく、こういう暑い時には、管絃の遊びなどもおもしろくないし、(かといって何もしないのでは) なかなか日の暮れないのがつらいものだ。宮仕えをしている若い人たちは、がまんができませんね。(昼の長い時間) 帯も解かずにいるのでは。せめて、ここでなりと気ままにくつろいで」云々。

〔考察〕『源氏物語』は、源氏が六条院の釣殿に赴いて涼む場面。当歌の第一・二句「唐衣紐解きさけて」は、宮中で束帯を着なくてはならない若い殿上人に、帯を解いてくつろぐよう勧める源氏の言葉を踏まえる。当歌の下の句は、月が動いて泉に映るようになる現象を、まるで月が涼しい泉に向かっていくようだと言人化した表現。

船納涼

(城阪早紀)

127 涼しさはこゝそとまりと舟うけて月のかつらのかち枕せん

前赤壁賦。桂ノ權兮蘭ノ槳、擊ニ空明ニ兮沂ニル流光ニ。

〔出典〕雪玉集、八五四番。蘇軾、前赤壁賦(古文真宝後集、卷一、四九頁)。

〔異同〕『新編国歌大観』『前赤壁賦』ナシ。

〔訳〕 船の納涼

こゝこが涼しさのたどりつく港であるとはかりに船を浮かべて、月の光の中を桂の棹で漕ぎのぼるような船旅をしよう。

蘇軾の前赤壁賦。香り高い桂の權や木欄のさおで、透き通る月光の空しく明るい水を撃ち、水の面を輝き流れる月光の中をさかのぼりゆく。

〔考察〕当歌の「月の桂」は119番歌、参照。「桂の楫枕」に「桂の楫」と「楫枕」(船旅)を掛ける。

〔参考〕蘇軾は北宋の政治家、文学者。「赤壁賦」は前後二編の賦で、それぞれ「前赤壁賦」「後赤壁賦」と題する。「前赤壁賦」は元豊五年(一〇八二)七月、武漢市の西にある赤鼻山を古戦場の赤壁と誤り、遊覧した際に作ったもの。天地の長久と人の世の短さを対比させ、自然の美しさに対する喜びや感動を記す。引用部分は、美しい自然の中で酒を飲み、上機嫌で詠んだ箇所で、「渺渺兮予懷、望美人兮天一方(はるか遠くまで広がってゆく我が思い、空の果てに麗しき人の姿を眺めやる。)」と続く。

(城阪早紀)

夏月

128 うきてよるみるめ涼しくすみわたる月も南の浦風ぞ吹

〔出典〕雪玉集、七八四番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 夏の月

南から浜風が吹いて、浮いて打ち寄せられた海松布^{みまゆめ}も浜辺の景色も涼しく、月も一面に澄むことだなあ。

〔考察〕129番に引く『伊勢物語』八七段の一節を詠みこむ。「みるめ」は「見る目」と「海松布」(海藻の名)の掛詞。

(牛窓愛子)

夏海

129 あくるよの南のかせにうきてよるみるめ涼しき波のうへかな

いせ物語。其夜、南の風吹て、波いと高し。つとめて、その家のめのことも出て、うきみるの波によせられた

るひろひて、家のうちにもてきぬ云々。

〔出典〕雪玉集、四一九五番。伊勢物語、八七段。〔異同〕『新編国歌大観』「夏海―海」。『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 夏の海

翌日の夜の南風に吹かれ、浮いて打ち寄せられた海松布も浜辺の景色も涼しい、波の水面であるなあ。

伊勢物語。その夜、南の風が吹いて、浪がたいそう高い。翌早朝、その家に仕える女の子たちが出て、浮かんでいる海松が浪に打ち寄せられたのを拾って、家の内を持ってきた云々。

〔考察〕『伊勢物語』八七段は、蘆屋の里に住んでいた男を訪ねてきた友人たちが、布引の滝に遊行する場面。引用部分分は、その夜から翌朝の出来事を書いた一節。

(牛窓愛子)

夏山

^柏130 蔦楓みちなき物をうつの山折しも夏の色にあひぬる

いせ物かたりの詞、春の部にしるし侍り。

〔出典〕柏玉集、五三四番。伊勢物語、九段。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 夏の山

蔦や楓が茂り道も無いような宇津の山に入ろうとするちょうどそのとき、いかにも夏らしく感じられる風物に出くわしたなあ。

伊勢物語の文章は、春の部に書いてあります。(80番歌、参照)

〔考察〕『伊勢物語』九段では、旧暦の五月下旬に男が宇津の山に入ろうとするととき、修行者に出会ったとあり、また富士山を見て、「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ」という和歌を詠む。当歌はその場面を踏まえ、修行者ではなく夏の富士山を見たと詠む。

夏獣

（牛窓愛子）

131 ゆふ涼みあすもまた来ん飛鳥井の水かふ駒のみま草もよし

催馬楽、飛鳥井。あすかるに宿りはすへし。かけもよし。みもひもさむし。みま草もよし。

〔出典〕雪玉集、八九一番。催馬楽、飛鳥井、一二五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『催馬楽』「かけもよしーや おけ かけもよし」。

〔訳〕夏の獣

夕涼みをしに、明日もまた飛鳥井へ来よう。飛鳥井の水を与える馬の飼い葉も良いので。

催馬楽、飛鳥井。飛鳥井に休み所をとろう。木陰も涼しくてよい。お水も冷たい。お馬のかいばもよい。

〔考察〕当歌は『催馬楽』で歌われる、休み所に最適な飛鳥井の様子を踏まえて、明日もまた飛鳥井で夕涼みをした
いという気持ちを詠む。

（植田彩郁）

夏箏

132 堪かたき秋風もこの中のをに吹よりけりな声の涼しき

紅葉の賀の巻云、「さうのことは、中の細をのたへかたき」とて、へうてうにをしくたして、しらへたまふ云々。

〔出典〕雪玉集、八九二番。源氏物語、紅葉賀卷、三三一頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「涼しき―涼しさ」。『承応』『湖月抄』「たへかたきとて―たへかたきこそ所せけれどて」。

〔訳〕 夏の箏

（夏の暑さに）耐えきれず秋風も、この（耐えきれず切れやすい）中の細緒に吹いてきたのだなあ。それで琴の音色が涼しいのだ。

紅葉賀の巻によると、「箏の琴は、中の細緒の切れやすい（のが面倒でね）」と、平調にお下げになって、調子をお整えになる云々。

〔考察〕『源氏物語』は、藤壺に拒絶されて落ちこんだ源氏が、若紫との遊びにより慰められる場面。当歌は、箏の琴の細緒を切れにくくするため、低い調子の平調に下げる一節を踏まえ、秋風が中の細緒に吹き寄せて、そのため琴の音色が涼しくなると詠む。

（植田彩郁）

水辺納涼

133 なかめやる夕波涼し川かせの舟は一葉の秋をうかへて

淮南子曰、一葉落_テ而天下知_レ秋。

東坡。韓子華_カ石淙_ソ莊_ノ詩。一葉舞_ニ澎湖_ニ。註_ニ一葉_ハ言_ニ小舟_ヲ云云。

『三玉挑事抄』注釈 春部（下）・夏部

〔出典〕雪玉集、八四八番。淮南子（下）、卷一六、九四五頁。蘇軾詩集校注（蘇軾全集校注2 詩集2）、卷九。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『淮南子』「天下知秋―知歳之将暮」。『蘇軾詩集校注』「澎湖―澎湃」。「言小舟―指小舟」。

〔訳〕 水辺の納涼

遠く眺め渡すと、夕波が涼しく立っている。その川を、風に乗って落ちて行く舟は一枚の落葉のように見えるが、（一葉というところから）秋の姿を浮かび上がらせている。

淮南子によると、一枚の葉が落ちて、天下は秋を知る。

東坡（蘇軾）の「韓子華の石淙荘」の詩。一葉の木の葉が波立つ淵に舞う。注によると、一葉は小舟を言う云々。

〔考察〕『淮南子』は身近なことによって未来を察知することを意味し、東坡の詩は自らの身を大海の波濤に浮かぶ一枚の木の葉に例えたもの。当歌は一枚の落葉のような舟から、秋の訪れを感じさせる様を詠む。

〔参考〕当歌は、文亀三年（一五〇三）に成立した『文亀三年三十六番歌合』に収録。

（植田彩郁）

夏歌中

134しほせより頭れ出し神の代も隔ぬ波にみそきすらしも

〔出典〕雪玉集、七一九七番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 夏の歌の中

以生神、号_テ曰_ニ表津少童命_一。次_ニ表筒男命_一。凡_テ有_ニ九神_一矣。

〔出典〕該当歌なし。日本書紀、卷第一、神代上、四九頁。

〔異同〕『日本書紀』「遂將盪身—遂將盪滌身」「八十柱津日神—八十枉津日神」「次將矯其柱—次將矯其柱」。

〔訳〕 貴賤を問わない夏の祓

神は河の上流と下流を区別して波に浮いたが、人は身分の上下を問わず、神と同じ祓を受けているのだろう。

神代の巻によると、「だから、我が身の穢れを洗い去ろう」と仰せられて、すぐに出かけて筑紫の日向の小戸の橘の櫛原に着かれて、禊祓えをされた。こういう次第で身の穢れをすさごうとして、否定的な言い立てをきっぱりとなされて、「上の瀬は流れがとても速い。下の瀬は流れがとてもゆるい」と仰せられ、そこで中の瀬ですすがれた。これによって神をお生みになり、名付けて八十枉津日神と申す。次にその神の枉_{まが}っているのを直そうとして神をお生みになり、名付けて神直日神と申す。次に大直日神。また海の底に沈んですすがれた。これによって神をお生みになり、名付けて底津少童命と申す。次に底筒男命。また潮の中に潜ってすすがれた。これによって神をお生みになり、名付けて中津少童命と申す。次に中筒男命。また潮の上に浮いてすすがれた。これによって神をお生みになり、名付けて表津少童命と申す。次に表筒男命。合せて九柱の神である。

〔考察〕『日本書紀』は、黄泉の国から逃げ帰った伊弉諾尊が、その穢れを洗い去るため、河で禊祓をする場面。伊弉諾尊が、「上瀬は急流、下瀬は緩流で、どちらにも禊に適さない」と宣言して、中瀬で穢れを濯いだ一節を当歌は踏まえる。結句の「うく」は「(波に) 浮く」と「(祓を) 受く」の掛詞。

〔参考〕新編全集の本文と比較すると、「表中津少童命」が「中津少童命」になっている。寛文九年（一六六九）版は

『三玉挑事抄』と同文であるので、「異同」には挙げていない。

(吉岡真由美)

夏祓

137 おもふ事ならんもさそなはや川の瀬にます神の心をそくむ

中臣祓曰、速川乃瀬仁座須瀬織津比咩登云神、大海原仁持出奈牟。

〔出典〕雪玉集、八六一番。中臣祓（大祓詞注釈大成 上）。〔異同〕『新編国歌大観』『中臣祓』ナシ。

〔訳〕 夏の祓

思うことが成就しそうであるのも、いかにも速川の瀬にいらつしやる神の心によるものだと、その心を（川から水を汲むように）酌みとり思いやることだ。

中臣祓によると、速い川の浅瀬においでになる瀬織津比咩せおりつひめという神が、（祓い清めた罪を川から）大海原に持ち出してしまっちだろう。

〔考察〕中臣祓は儀礼を行うことにより、罪が祓い清められる過程を述べた部分。当歌はそれを踏まえ、自身の思いの成就是祓により罪がなくなったことによるものだとし、その喜びを詠んだもの。「くむ」は「酌む」と「汲む」の掛詞。

〔参考〕中臣祓は元々、毎年六月と十二月の晦日に朝廷で行われた公儀の大祓の行事及び大祓の詞を指し、祭事を取り行なう中臣氏に因んで「中臣祓」と称する。後に私的な祓の儀礼が盛んに行われるようになると、公的祓を「大祓」、私的祓を「中臣祓」と区別するようになる。宮地直一・山本信哉・河野省三編『大祓詞大成一〜三』（内外書

籍、一九三五年～一九四一年）所収のもので本文が一致するのは、慶長期の『中臣祓 仮名附本』のみである。注
釈書では宝永元（一七〇四）年に刊行された『中臣祓句投』が同文である。

（森あかね）